

戦時下の「能海寛」

タイトル	戦時下の「能海寛」
著者名	高本康子
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第 18 号
ページ	55－62
発行年	2013.3.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。 石峰と号す。明治元年5月18日島根県浜田市金城町長田（当時は東谷村）浄蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあつては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦前伝の大藏經の經典を求め英訳經典世に出す目的で当時領国中であつたチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の34年の生涯に「般若心經」西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書として永遠に伝う。

戦時下の「能海 寛」

北海道大学 高 本 康 子

能海寛をはじめ、河口慧海(1866-1945)、青木文教(1886-1956)、多田等観(1890-1967)、寺本婉雅(1872-1940)などの体験は、日本人にどのように受け止められてきたのだろうか。彼等は多くの場合、「入蔵者」と呼ばれてきた。いうまでもなく、「入蔵」した人物、という意味を持つ表現である。

彼等の「入蔵」が、近代日本において、どのように認識されてきたのか、その一部分をなすものとして、本稿では、太平洋戦争開戦直後の日本において、能海に関心が持たれていたことに注目し、雑誌『サンデー毎日』1942(昭和17)年8月9日号記事「西藏入国を企てた求道僧の死」(18-21頁)を取り上げる(1)。同記事の記述の検討を通じて、戦時下の日本において能海に向けられた視線のありようを、解明しようとするものである。

1. 「入蔵者」と能海寛像

本節ではまず、近代日本における「入蔵者」像がどのようなものであったのかを振り返ることとしたい(2)。明治期において「入蔵者」は、チベットの「探検家」であった。例えば、ラサリに成功し、そのチベット旅行談で世上の多大な関心を一身に集めた河口慧海は、そのチベット旅行記『西藏旅行記』(博文館、1904年)の「序」において、「余の此地に進入せしは勇敢なる冒険家諸士に倣ふて、探検の功を全ふし、広く世界の文明に資せんとの大志願ありしに非ず」(上巻、1頁)と述べている。河口のこの言葉は、当時「此地」すなわちチベットへ「進入」すること、つまり「入蔵」が、「探検」に類する行為であると見なされていたことの一端を示すものでもあると言えるだろう。事実、1905(明治38)年、雲南省とチベットとの境界付近で、能海が殺害されたという報道がなされた時にも、「西藏探検家」およびそれに類する表現が、能海寛の名に枕詞のように頻繁に付された(「西藏探検家能海寛最後の手紙」『万朝報』1905年7月24日付)。

大正期に入ると、「入蔵者」は、チベットに関する「権威」として扱われ始める。それは例えば、いわば入蔵者が鋭く対立した二つの事件の結末に、見て取ることができる。すなわち、1917(大正6)年の、河口慧海と青木文教が、チベットから持ち帰った仏典をめぐって争った「大正の玉手箱事件」(3)、および、1922(大正11)年の、寺本婉雅が出版した『西藏語文法』を、河口慧海が烈しく批判した一連の報道(4)、である。

この二つの事件の結末には、注目すべき共通点がある。それは、河口側の主張に反論が徹底的にされなかった点である。「玉手箱事件」において大谷光瑞が青木に十分な反論を許さず手を引かせたこと、また寺本や大谷大学が河口の激しい攻撃を受け流すだけだったことには、入蔵者として、当時において、河口に拮抗できる「威勢」が、青木にも寺本にもなかったことが示されている。チベット情報の権威として、河口とこの二人とでは、社会

的な認知のされかたに、彼我の非常な格差があったということが、ここから読みとれる。

昭和期になると、更に変化が見られる。「入蔵者」は、「東亜の先覚」として語られるようになるのである。満洲国建国をはじめとする一連の出来事が、日本人の「大陸」への関心を高めたことは言うまでもない。その「大陸」に万難を排して挑んだ「先覚」のヴァリエティの一例として、「入蔵者」が登場するのである。これについては、本稿次節以降で詳しく述べる。

現代においては、「入蔵者」はチベットの「理解者」という、新しい側面が加わった。能海像も、チベット文化を高く評価しそれに憧憬を抱いていた日本人、というものになった。この新しい能海像を提示したのが、山口瑞鳳『チベット』（上巻、東京大学出版会、1987年）であったと言えるだろう。

山口は、能海がチベット・清国境近くの打箭爐から『東洋哲学』に寄せた旅行報告「進蔵通信」の中の、チベット文化に関する記述(5)を、チベットについて未開の文明と見下げることなく、「正当な評価」をしたものとして、高く評価し、能海が生きて日本に戻っていれば、日本のチベット学は大きく変わった可能性があるとし、そうはならなかったことを「惜んであまりある」（同書、75頁）と表現した。

すでに1917（大正6）年の『能海寛遺稿』において太田保一郎が、山口と同様の見解を示してはいるが(6)、チベット学者として日本人入蔵者の動向を初めてまとめたと言っている山口のこの記述の影響は、『能海寛遺稿』の太田の記述より、はるかに大きかったと思われる。その後能海について述べる文献がこの山口の能海評を引用したり、ほぼ同様の記述をしたりしていることに、その影響の大きさがうかがわれる(7)。

2『サンデー毎日』記事「西藏入国を企てた求道僧の死」

本稿で検討する、「西藏入国を企てた求道僧の死」は、雑誌『サンデー毎日』1942（昭和17）年8月9日号所載（18・21頁）の、宮本謙吾の記名記事である。

筆者宮本謙吾は、彼が論文を寄せている三古会編『近世の学芸』（八木書店、1976年）末尾の執筆者紹介欄によれば、1891年生まれで、当時は「西南文教研究所」（433頁）所属である。同書所載の宮本論文が、「上田幻斉と横井小楠」（194・207頁）であり、また国会図書館所蔵の彼の著作(8)を合わせて見ると、詳細は不明ながら、人物伝を中心に執筆活動を行っていた人物であると推測される。

上掲『近世の学芸』編者である三古会は、同会立ち上げ当初から事務を担当した歴史学者森銑三（1895・1985）が伝えるところでは、「史伝の研究家」（1頁）を中心に結成された会である。従って同会に宮本が所属しているということは、彼自身この種の研究活動に、少なくとも関心を持つ人物であったと考えて差し支えはないと思われる。事実、宮本は、1936（昭和11）年11月7日の第28回例会から参加し（森銑三「三古会小記」、11頁）、「若山義一のこと」（第64回例会、昭和14年11月11日、前同22頁）、「中江兆民の子息」（第67回例会、昭和15年2月10日、前同23頁）、「揚子江か、楊子江か」（第68回例会、昭

和 15 年 3 月 9 日、前同 23 頁) 等の発表をしている。

では、この記事が世に出た 1942 (昭和 17) 年 8 月初旬とは、日本にとってどのような時期であったのだろうか。

大陸においては、1931 (昭和 6) 年に満洲事変、1937 (昭和 12) 年に廬溝橋事件というように戦火が拡大した。更に、記事の出る前年 12 月には、8 日の真珠湾攻撃を皮切りに、10 日にはマレー沖海戦に勝利、25 日には香港を占領し、そして以上の動きと歩を合わせるように、ビルマ作戦が展開されていた。明けて 1942 (昭和 11) 年には、1 月にマニラ、2 月にシンガポール、3 月にはラングーンを占領し、ジャワの蘭印軍を降伏させるなどと、日本軍は続けざまに南方進出を果たした。

当時女学校の学生であった作家田辺聖子の回想に、日本軍のこのような「無敵」(『欲しがりません勝つまでは』新潮社(新潮文庫)、1981 年、71 頁の活動ぶりをめぐる、当時の日本の雰囲気を見て取ることができる。田辺は、「毎朝の新聞を見るのが楽しみだった」(前同) と書き、人々の反応を以下のように伝える。田辺の家は写真館を営んでおり、そこで彼女が目にした光景である。「どないだす。日本軍の、まあ強いこと」客たちは待合室で知る人も知らぬ人も、たがいに肩を叩かんばかりに昂奮して話し合う」(75 頁)。また、「町の医院や散髪屋、銭湯などでは、世界地図を壁に貼り、日本軍が占領した島や陥落させた町に日の丸の紙旗をつけたピンを立てたりして、よろこんでいた」(175 頁)。

しかしその一方で田辺は、「いよいよ戦争が身近になった感じ」(101 頁) とも書く。それはつまり、国民生活において、戦時期の諸統制・制限が開始されたことを指す。女学生の彼女の生活においても、それは以下のような変化となって現れた。「英語は敵性語になり、英語の授業がなくなった。(中略) 夏休みは返上して、防火訓練に十日間、出てこなければならない。母にあって、カスリのもめんでもんぺを縫ってもら」(101 頁)。事実、1942 (昭和 17) 年 2 月には、みそ、醤油、衣料の切符配給制度が開始され、日本軍の南方進出が続いているさなかの 4 月には、東京、名古屋、神戸に初空襲があった。6 月にはミッドウェー海戦の敗北があり、これが、日本にとって好ましからざる方向へ戦局が動き始める転機となった。この後、1943 (昭和 18) 年 2 月にはガダルカナルからの撤退、1944 (昭和 19) 年 7 月にはサイパンの陥落、1945 (昭和 20) 年 2 月には硫黄島の守備隊全滅、3 月には東京大空襲、大阪大空襲、4 月には米軍の沖縄上陸、そして広島・長崎への原子爆弾の投下があり、8 月 15 日の敗戦へと続いていく。

したがって、この記事が出た 1942 年 8 月は、年始から続いた戦勝の雰囲気が色濃く残りながら、戦時期の厳しさも漸く増しつつあった時期と言えるのではないかと思われる。

3. 能海への注目

以上のような状況において、能海にはどのような関心が持たれたのか。記事における記述には、そのありように 2 点の特徴を見て取ることができる。

第 1 点は、「大陸および南方で活躍した人物」ということである。記事は、「今次大東亜

戦争の勃発以来、大陸および南方で活躍した幾多の人物について新聞や雑誌に大きく紹介され」ている(21頁)、と記述している。従って、太平洋戦争が、香港、ビルマ、フィリピン、シンガポール等の各地への日本軍進出によって進展した結果、それまでの「大陸」に加え、「南方」への関心が、新たな高まりを見せつつあったと言えるだろう。その「南方」に関連する日本人の先覚者、いわゆる「図南」の先覚者の一人として、1942(昭和17)年当時、頻繁にメディアに登場するものの一つが、菅沼貞風という名前である。

菅沼貞風(1865-1889)は、平戸出身で、松浦藩藩主松浦詮の学資援助により東京帝国大学へ進んだ。卒業後、東京高等商業学校(現一橋大学)教官となる。日本の南方進出を強く主張し、ジャーナリスト福本日南(新聞『日本』)らとともにフィリピンへ調査に入り、現地で死亡した(9)。

1942(昭和17)年における彼への注目は、南進論を説いた彼の著書であり、それまで世に出ていなかった『新日本の図南の夢』(岩波書店、1942年)が出版されたことにもうかがえる。加えて、彼の評伝が複数刊行された。すなわち、花園兼定『南進論の先駆者菅沼貞風』(日本放送出版会)、河西新太郎『南へ飛ぶ歌 南進の先駆者菅沼貞風伝』(田中宋栄堂)、江口礼四郎『菅沼貞風伝』(八雲書林)である(10)。いずれも「南進」という表現が付せられていることに、その関心の持たれようの一端を見て取ることができる。

第2点は、「明治」期に、「西藏」で、「行方不明」になった人物、ということである。記事では、能海を紹介するにあたって、「日本人で明治年間に西藏探検を企て行方不明となった二人のうちの一人」(18頁)という言葉のしかたをしている。この「二人」というのは、能海と、1889(明治22)年に新疆・チベット調査を志して発った直後行方不明となった浦敬一(1860-?)である。

浦敬一は、上述の菅沼と同様に平戸出身で、やはり藩主松浦詮の学資援助により「専修学校」に進んだ。1887(明治20)年、大陸へ渡り、大陸での政治活動を志す民間人の拠点であった漢口楽善堂に加わる。1889(明治22)年、新疆へのロシア勢力の波及状況を探るため、新疆、チベット、モンゴル調査に出発した。その探査行は、漢口—蘭州—ハミ—ウルムチ—イリーカシュガル—チベット—成都—重慶を予定ルートとするものであったが、実際には蘭州出発直後、消息を絶っている(11)。

記事が出る前年、1941(昭和16)年、北部仏印に続いて同地方南部への日本軍進駐が実現し、太平洋戦争が開戦する直前の11月、『興亜の先覚浦敬一書簡付略伝』(東半球協会編)という小冊子が出されている。これは、浦が上記探査行の出発前、彼の父に宛て書いた書簡(1889年3月25日付)に、「浦敬一略伝」を付けた簡略な出版物であるが、それだけに、この当時、浦にどのような視線が向けられていたのかを、端的に見て取ることのできる資料でもあると考える。この「略伝」冒頭、浦は、「国歩艱難の時」に、「亜細亜恢復」の「志」のために「塞外の地」に単身挑み、「悲風惨雨」に耐え、ついに「杳として其の踪跡を失した」人物として紹介される(14頁)。

サンデー毎日の「西藏入国を企てた求道僧の死」において能海の姿は、前者、すなわち

「大陸および南方で活躍した人物」、そして後者、「明治」期に、「西藏」で、「行方不明」になった人物として、しかし「あまりに有名な平戸の浦敬一に比し、能海寛の事績は一般に知られてゐない」（18 頁）ことによって、読者の前にいわば、召喚されるのである。

4.「能海寛」像の特徴

では、能海はこの記事中、どのように記述されていったのか。その特徴としては、以下①～④の4点が挙げられる。

その第一は、①「薄幸の求道僧」であること、である。記事には、「能海寛の西藏入りは青年客気にかられての仕事ではない。彼は僧侶で、しかも恩師南条文雄師の志を継ぐと称して入蔵を企てたのであるから、全く求法の精神に燃えてのことである」（18 頁）とある。これに続いて、能海の入蔵の経緯、横死報道、その後の搜索等について、詳細に説明される。一貫して、能海の経験がいかに困難に満ちたものであったか、そこに重点を置いた記述となっている。

第二に挙げられるのは、②「忘れられた」存在であること、である。「能海寛師については殆ど世人は忘れてゐるかのやうである」（21 頁）というように、記事中では、この点に繰り返し触れられる。

第三は、「先覚的な日本の志士」であること、である。記事中の記述に見る、このような「志士」の特徴は、その人物が「勇猛不退転」（18 頁）であり、かつ、「土民」（20 頁）に殺されるという悲劇に見舞われていることの2点である。能海についても、「あれほど勇敢な人」（19 頁）等の表現が繰り返し使用され、彼の入蔵は、これを証するエピソードとして詳述される。最後に、現地の人々に殺害されたことが、最大の悲劇として語られる。

記事中、このような「志士」として、能海とともに紹介されるのは、上述の浦敬一の他、「日露戦争の特別任務に服した松崎保一、中山直熊、脇光三」、「満洲事変の口火を切つた中村少佐」（20 頁）の5人である。松崎保一（1874-1904）、中山直熊（1880-1904）、脇光三（1880-1904）は、日露戦争時、横川省三、沖楨介などと同様に、満洲のチチハル近くまで潜入し、鉄橋爆破を試みるが失敗、命を落としたことで知られる（12）。中村震太郎（1897-1931）は、地誌調査のため大興安嶺の東側に潜入中、中国側に拘束され、銃殺ののち遺体を焼却された人物である。

能海を含め、この6人に関する記事の記述に共通するのは、「土民に殺された」（20 頁）とされる点である。記事中では、「支那大陸」において日本人が遭遇する危険として、「病魔」、「猛獣」、「土民」が挙げられ、そのうち最大のもの、そして危険の「九分九厘」を占めるものが「土民」によるものであると、説明されている（20 頁）。従って能海を含むこれらの「志士」6人はいずれも、大陸における最大の危険に遭遇し、あえなく落命した人物、と特徴づけられているのである。

以上①②③の3点は、明治以降、能海に言及する記述において共通するものである。例えば、この記事に先立つ9年前、1933（昭和8）年に出版された『東亜先覚志士記伝』の

記述も、この点で同軌のものであると言えるだろう(13)。本論において注目したいのは、次の④である。それは、特に 1942 年 8 月という時期を背景とした特徴であると思われることによる。

④は、「人柱」である、というものである。記事は以下のように述べる。「皇軍破竹のビルマ作戦の進展とともに、雲南国境を突破して進んだわが軍は、奇しくも今を去る四十二年前、雲南の奥地で西藏に入ると称して消息を絶つたまま今だに行方の知れない日本人能海寛のゆかりの地に踏み入った」(18 頁)。

ビルマ作戦は、1941 (昭和 16) 年 12 月に開始され、翌 1942 (昭和 17) 年 3 月、中心都市ラングーンに日本軍が進駐、5 月にはビルマ全域が制圧され、日本軍はそこから更に国境を越え、中国の雲南省に到達した。激戦ではあったが、戦局は迅速に展開しており、それが記事中に「破竹」と表現される根拠となったと思われる。このビルマ作戦によって、雲南が日本人の視界の中央に入り、その結果能海に関心が向けられることとなったと思われる。

5. おわりに

能海とともに「二人」のうちの一人とされ、能海に比較して「あまりに有名な」と言及される浦敬一は、しかし、能海のように「西藏探検」(18 頁) だけを目指した人物ではない。浦の主な関心は、当時ロシアが動こうとしていた新疆地方であり、「西域」であった。浦の探査行においてチベット調査はむしろ、副次的な位置づけのものであった(14)。しかし記事では、その浦の事績から、「西藏探検」が焦点化され、クローズアップされて取り上げられた。つまりチベットは、焦点化しクローズアップしなければ、日本人の視界に入っていない存在、「忘れられた」存在であったと言える。

しかしこの、1942 (昭和 17) 年 8 月という時期に、この焦点化およびクローズアップがなされたということには、日本人の視界において、「大陸」に加えて「南方」という方向性が登場したために、その両方に連続性を持つ地域として、チベットが浮上しつつあるのを見て取ることができるだろう。この記事において能海は、当時チベットが持ったこのような存在感を体現、象徴する人物として捉え直されたのだと言える。

注

- (1) なお、同記事について筆者は、能海寛研究会会員盛田武士氏のご教示を得、同氏より記事複写のご提供も受けた。記して感謝申し上げる次第である。
- (2) これについてはすでに、高本康子「「入蔵者」イメージと能海寛」(『石峰』第 11 号、2006 年、1-17 頁) に詳述した。
- (3) 「大正の玉手箱事件」に関しては、山口瑞鳳の言及が最初のものであると思われる(山口「解説青木文教師」『西藏』芙蓉書房、1969 年、432 頁)。その後、江本嘉伸が入蔵日本人 10 人を取り上げた列伝『西藏漂泊』の中で、詳細に記述している(江本『西藏漂泊』

下巻第 16 章「大正の玉手箱事件」、山と溪谷社、1994 年、138-167 頁）。また、棚瀬慈郎が、英国の外交史料を使用して「旧 India Office 所蔵 チベット関連ファイルの中野『大正の玉手箱事件』関連史料について」（『チベット文化研究所年報』第 34 巻第 1 号、25-28 頁）を発表している。最新の研究成果としては、奥山直司「青木文教と河口慧海」（白須浄真編『大谷光瑞と国際政治社会』勉誠出版、2011 年、129-159 頁）。

(4)これについて、金子民雄「解説」（『寺本婉雅著作集』第四巻、うしお書店、2005 年、1-18 頁）、高山龍三『河口慧海一人と旅と業績一』（大明堂、1999 年、147 頁）を参照。『中外日報』における関係記事は以下。「著者寺本婉雅氏に『西藏語文法』の絶版を要求す（一）」（1922 年 11 月 30 日付）、「著者寺本婉雅氏に『西藏語文法』の絶版を要求す（二）」（同年 12 月 1 日付）、「著者寺本婉雅氏に『西藏語文法』の絶版を要求す（三）」（同年 12 月 2 日付）、「度量を見せた谷大側」（同年 12 月 2 日付）、「著者寺本婉雅氏に『西藏語文法』の絶版を要求す（四）」（同年 12 月 3 日付）、「西藏語文法の批評の批評会 答弁の価値なしで結論」（同年 12 月 9 日付）。なお、この二つの事件に見る「入蔵者」およびチベットへの関心の変化については、高本康子『近代日本におけるチベット像の形成と展開』（芙蓉書房出版、2010 年）に詳述した（183-187 頁）。

(5)能海寛「進蔵通信」（『東洋哲学』第 7 編第 5 号、1900 年、233-4 頁）による。これは最初の入蔵が失敗してのち、国境の町打箭爐に滞在した際の観察である（1900 年 2 月付）。

(6)太田については、高本康子「能海寛と太田保一郎—『能海寛遺稿』をめぐって—」（『石峰』第 16 号、2011 年、8-14 頁）に詳述した。

(7)山口の評価をそのまま引用しているものとしては、例えば村上護『風の馬—西藏求法伝一』（佼成出版社、1989 年、199-200 頁）がある。ほぼ同様の記述となっているものとしては、例えば江本嘉伸『西藏漂泊』（上巻、292 頁）が挙げられる。能海の地元島根県金城町で能海研究を進めている人々の著作においても、例えば、岡崎秀紀編『島根の高校生黄土地帯を越えて六盤山へ』（第 2 回（2000）島根県高校登山部寧夏国際交流登山調査隊、2001 年、150 頁）に山口の見解と同様の記述が見られる。

(8)国会図書館所蔵の宮本著作は以下である。著書に『聖城怪談録』（上下、碧水閣文庫、1929 年）、『大聖寺絹業史』（宮本謙吾、1942 年）、『近世剣客伝』（熊谷書房、1943 年）。編書に『東方芝山』（碧水閣文庫、1928 年）。その他に、「久谷焼」「久谷吉田屋窯」（『陶器講座』第 4 巻、雄山閣、1935 年）、「九谷焼」「久谷吉田焼」（『陶器講座』雄山閣、1938 年）、

本文既掲「上田幻斎と横井小楠」（三古会編『近世の学芸』八木書店、1976 年）がある。

(9)菅沼については主に、以下を参照した。菅沼貞風『大日本商業史』（五月書房、1979 年、初版は 1892 年東方協会から出版）、福本日南「菅沼貞風」（『日南集』東亜堂、1910 年）、同「菅沼貞風君卒す」（『明治文学全集』37、筑摩書房、1980 年）、河嶋慎一「菅沼貞風とフィリピン」（国立国会図書館編『アジア・アフリカ資料通報』第 21 巻第 10 号、1984 年、32-36 頁）、有賀貞彦「明治期における「南進」論の一系譜—菅沼貞風『新日本の図南

の夢』をめぐって―」（『東南アジア研究年報』第26号、1984年、74-89頁）、森達生「中天切り裂く閃光に似て―菅沼貞風その短く特異な生涯と「身後の功業」―」（『日本及日本人』1991年、88-100頁）、広瀬玲子「明治中期の南進論とアジア主義―菅沼貞風と福本日南を中心に―」（『北海道情報大学紀要』第8巻第2号、1997年、23-39頁）。

(10)この前年、1941（昭和16）年にも、赤沼三郎『菅沼貞風』（博文館）、福本日南『菅沼貞風略伝』（東半球協会）が出されている。

(11)浦については主に、塙薫蔵『浦敬一』（大空社、1997年、初版は淳風書院、1924年）、東半球協会編『興亜の先覚浦敬一書簡付略伝』（東半球協会、1941年）を参照した。

(12)東京都文京区の護国寺に、1908（明治41）年、横川、沖、松崎、中山、脇、田村一三の6人を記念して、大山巖の題字、福島安正の撰文による「報国六烈士碑」が建立された。護国寺は徳川綱吉が生母のために建立した寺院であり、このような場所に記念碑が建てられていることから、彼等に対する当時の注目の大きさがうかがい知られる。

(13)該当部分を以下引用する。「能海寛が明治三十一年十一月日本を発して西藏探検の途に上り、途中幾多の障碍に遭ふも百折撓まず、前後四年間に亘る難行苦行を重ねて遂に蛮境に非業の死を遂げた事実に至つては案外世人に忘れられてゐるやうである」（『東亜先覚志士記伝』上巻、黒龍会出版部、1933年、503-4頁）。

(14)これについては、高本『近代日本におけるチベット像の形成と展開』（芙蓉書房出版、2010年）に詳述した（30-32頁）。



第18回年次大会での会員研究発表 2012.7.8